

岩手県におけるブドウ「シャインマスカット」の適正着果量

誌名	東北農業研究
ISSN	03886727
著者名	大野,浩 西田,絵梨香 佐々木,真人
発行元	[東北農業試験研究協議会]
巻/号	72号
掲載ページ	p. 69-70
発行年月	2019年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



岩手県におけるブドウ‘シャインマスカット’の適正着果量

大野 浩・西田絵梨香・佐々木真人

(岩手県農業研究センター)

Appropriate fruit yield of grape ‘Shine Muscat’ in Iwate Prefecture

Hiroshi OHNO, Erika NISHIDA and Makoto SASAKI

(Iwate Agricultural Research Center)

1 はじめに

ブドウ‘シャインマスカット’は、良食味の大粒種でジベレリン処理により無核となり、皮ごと食べることができるため、岩手県においても生産量が増加し、消費者の認知度も高くなっている。‘シャインマスカット’は、短梢せん定に適し、省力的な栽培が可能であることから、さらに生産が拡大することが期待されている。

‘シャインマスカット’は、比較的耐寒性が優れているが、寒冷地において安定生産を可能とする着果量等についての知見は少ない。

本研究では、今後の高品質果実の安定生産拡大に向け、岩手県における‘シャインマスカット’の短梢栽培での適正着果量を解明する。

2 試験方法

(1) 供試樹

シャインマスカット / 5 BB 短梢 H 型仕立て (2008 年定植)

(2) 植栽距離 4 m × 8 m

(3) 供試樹数 4 樹

(4) 試験樹の管理方法

新梢は棚下に下垂させ、1 新梢あたり葉枚数は 20 ~ 25 枚となるよう管理した。発芽後から収穫終了まで雨よけトンネル被覆を行い、果房は 1 房 45 粒、房重 500g 程度になるよう調整した。

また、7 月中旬に袋かけ (白色袋) を行った。

(5) 調査方法

果皮色は、山梨県作成シャインマスカット用カラーチャート (1 ~ 5) を使用した。新梢の登熟率は休眠期 (12 月下旬) に調査した。

(6) 調査果数 各試験区 10 果

(7) 目標とする果実品質

9 月中旬に収穫可能で、糖度 17 度以上

3 試験結果及び考察

(1) 主枝 1 m あたりの新梢本数

1 新梢の着房数は 0.8 房、主枝 1 m あたりの新梢本数を 5 本、8 本または 11 本とした場合、新梢本数 5 本では収量が低く、11 本では収量が多いが、糖度の上昇が遅く、酸度も高い傾向となった。新梢の登熟は、いずれの試験区とも良好であった。よって、主枝 1 m あたりの新梢本数は 8 本程度が適する (表 1、図 1)。

(2) 1 新梢あたりの着房数

主枝 1 m あたりの新梢本数は 8 本、1 新梢あたりの着房数を 0.6 房、0.8 房または 1.0 房とした場合、1 新梢あたりの着房数が多いほど収量は増加したが、1.0 房では糖度の上昇が遅れる傾向となった。新梢の登熟は、いずれの試験区とも良好であった。よって 1 新梢あたりの着房数は 0.8 房程度が適する (表 2、図 2)。

(3) 以上より、主枝 1 m あたりの新梢本数を 8 本程度、1 新梢あたりの着房数を 0.8 房程度にすることで、糖度 17 度以上、10a あたり 1.6t 程度の収量を確保できることが示された。

4 まとめ

‘シャインマスカット’は、樹勢が強く多収が可能な品種であるが、着果量が多すぎる場合は熟期が遅れるとともに果実品質が低下する。また、岩手県等の寒冷地においては、気象条件により発芽不良等の凍寒害が発生する恐れがあるので、高品質果実の安定生産のためには適正着果量を厳守することが望ましい。

表1 主枝1mあたりの新梢本数の違いが果実品質等に及ぼす影響 (2014~2017年の平均±標準偏差)

新梢本数	LAI (指数)	房重 (g)	粒重 (g)	糖度 (°Brix)	酸度 (g/100ml)	果皮色 (CC指数)	収量 (kg/10a)	登熟率 (%)
5	0.9±0.1	486±46	11.4±1.2	17.9±1.1	0.37±0.04	3.4±0.4	1,106±269	90±4
8	1.5±0.1	528±53	12.9±1.7	17.8±1.3	0.37±0.06	3.1±0.4	1,916±164	91±13
11	2.0±0.3	455±59	11.3±0.8	16.9±1.2	0.47±0.06	2.9±0.3	2,316±235	96±5

注) 収穫期: 9月下旬。着房数は0.8房/1新梢とした。調査果数: 各区10果。

表2 1新梢あたりの着房数の違いが果実品質等に及ぼす影響 (2014~2018年(2017年除く)の平均±標準偏差)

着房数 (房/1新梢)	房重 (g)	粒重 (g)	糖度 (°Brix)	酸度 (g/100ml)	果皮色 (CC指数)	収量 (kg/10a)	登熟率 (%)
0.6	548±38	12.7±0.6	17.7±1.2	0.34±0.08	3.0±0.3	1,414±291	93±2
0.8	556±76	12.6±1.3	17.3±0.9	0.36±0.11	2.8±0.2	1,887±198	91±6
1.0	577±31	12.7±1.1	17.0±0.8	0.39±0.11	2.6±0.2	2,357±209	92±4

注) 試験樹の概要等は表1に同じ。主枝1mあたりの新梢本数は8本とした。

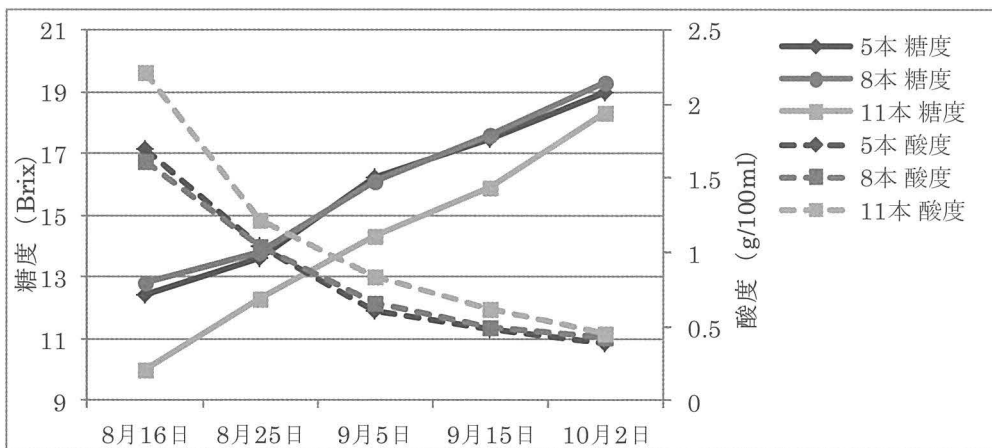


図1 主枝1mあたりの新梢本数の違いが糖度及び酸度に及ぼす影響 (2017年)

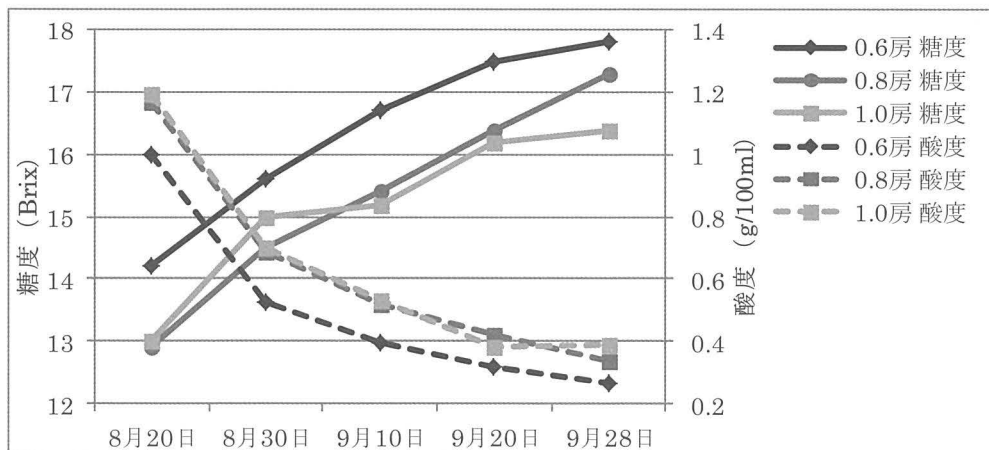


図2 1新梢あたりの着房数の違いが糖度及び酸度に及ぼす影響 (2018年)